

九州大学学術研究都市構想

九州大学学術研究都市の新たなフェーズにおける事業方針



2019年1月

九州大学学術研究都市推進協議会

I	はじめに	2
II	九州大学学術研究都市形成のこれまでの取組	3
	1 知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システムの構築	3
	2 知・住・悠の舞台となる快適空間の形成	6
III	社会経済情勢の変化	10
IV	新たなフェーズにおけるめざす姿	11
V	めざす姿の実現に向けた課題	12
VI	めざす姿の実現に向けた取組の方向	13
	戦略1 『知の交流・創造活動によるイノベーション・エコシステムの構築』	13
	戦略2 『快適で質の高いライフスタイルを実現する環境整備』	15
	戦略3 『世界・アジアとの交流』	16
	戦略4 『九州大学学術研究都市のシティプロモーション』	16
VII	めざす姿の実現に向けた推進方策	17
	1 推進体制	17
	2 めざす姿の実現に向けたプロジェクト	17

I はじめに

九州大学の福岡都市圏西部(糸島半島地域)への移転を契機として、九州大学を中心とした新しい学術研究都市の創造を目指して、1998(H10)年5月、地元産学官の総意により、「九州大学学術研究都市推進協議会(以下「協議会」という。)」が設立された。以後、3年間にわたる検討を経て2001(H13)年6月に「九州大学学術研究都市構想(以下「構想」という。)」を策定した。

この構想に基づき、「知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システムの構築」と「知・住・悠の舞台となる快適空間の形成」の実現を目指すため、推進機関として、「財団法人(現:公益財団法人)九州大学学術研究都市推進機構」(以下「OPACK」という。)が2004(H16)年に設立された。

協議会メンバー及びOPACKは、構想実現のため連携・協力し、九州大学移転の各段階において、学術研究都市の基盤整備、産学官連携の推進、企業・研究機関の誘致活動など、様々な取組を推進してきたところである。

協議会設立から20年、構想策定から17年となる昨年(2018(H30)年)9月、九州大学の伊都キャンパスへの移転がついに完了した。この間、学術研究都市の環境整備が進むとともに、産業立地基盤の整備や研究機関等の進出、多くの共同研究事業の創出など、学術研究都市づくりが着々と進んできている。

一方で、国の新たな科学技術基本計画の策定、人口減少社会への突入、地球環境問題の高まり、さらなるグローバル化の進展など、学術研究都市を取り巻く社会経済情勢は大きく変化してきている。

今後は、このような変化を踏まえ、構想の総仕上げに向けて産学官民がより一層連携し、新たなフェーズを迎える学術研究都市づくりを力強く推進していく必要がある。

本事業方針は、これまでの成果を検証し、整備が進んだ学術研究都市のハード・ソフトの資産のさらなる活用や今後の社会経済の発展を視野に入れ、学術研究都市の新たなフェーズにおける10年後の目標像を示すとともに、その実現に向けた関係機関・団体の取組の方向等を示すために策定したものである。

2019年1月

九州大学学術研究都市推進協議会

Ⅱ 九州大学学術研究都市形成のこれまでの取組

1 知の交流・創造活動を促進する地域科学技術システムの構築

(1)九州大学伊都キャンパスの整備

九州大学伊都キャンパスは、2018(H30)年、約2万人の教職員・学生が活動する272haの日本最大の単一キャンパスとして完成した。キャンパスには、教育研究施設、情報発信拠点、文化・学術交流施設、研究者滞在施設、学生宿舎等が順次整備されてきた。

また、キャンパスの整備にあたっては、周辺環境に与える影響に配慮し、自然との共生(野生動植物の保全、水循環系の保全)および歴史との共生(歴史環境資源の保全)を実現し、これからの都市づくりや開発のモデルを示すものとなっている。

2005	●工学系開校、理系図書館、ビッグオレンジ(情報発信拠点)開館	2013	●伊都ゲストハウス開館
2006	●ドミトリーⅠ(滞在・学生宿舎)開館	●次世代燃料電池産学連携研究センター(NEXT-FC)開所	
	●(独法)産業技術総合研究所「水素材料先端科学研究センター」開館(2013.4から九大施設)	2014	●椎木講堂竣工、大学本部移転、基幹教育院開校
2009	●全学教育施設、比較社会文化・言語文化研究教育棟開設	2015	●ドミトリーⅢ、伊都協奏館開館
	●稲盛財団記念館寄贈、稲盛フロンティア研究センター開所		●理学系開校
	●ドミトリーⅡ開館		●カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所(I ² CNER)第2研究棟開設
2010	●最先端有機光エレクトロニクス研究センター(OPERA)開所	2018	●共進化社会システムイノベーション施設開設
2012	●カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所(I ² CNER)第1研究棟開設		●人文社会科学系、農学系開校、中央図書館開館
			●伊都キャンパス移転完了

注)各年表の項目は暦年表示(次頁以降同じ)



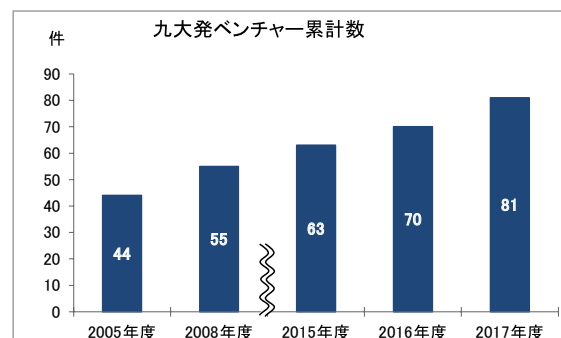
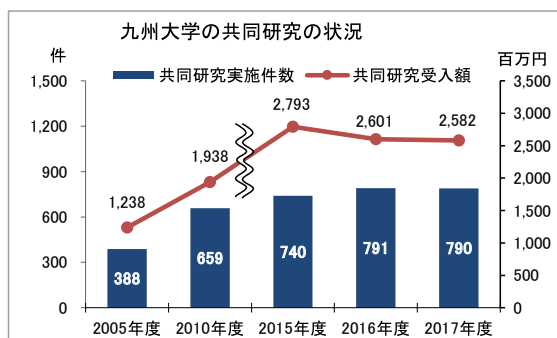
伊都キャンパス全景



カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所



水素材料先端科学研究センター



(2) 実証実験キャンパスなど時代に先駆けた取組

九州大学においては、最先端の教育・研究活動に加えて、キャンパス内ネットワークの整備による学生のPC必携化(BYOD:Bring Your Own Device)、ラーニングアナリティクスに基づく教育改革、「共創学部」の創設など、時代に先駆けた取組が始まっている。

また、豊かな自然を有する地区に整備された伊都キャンパスは、生物多様性の保全、環境に配慮したキャンパス整備に加え、広大な敷地や人的資源、大学の研究シーズを活用した、エネルギーマネジメント(水素エネルギー等)、新交通システム、ICカードによる個人認証など、新しい技術や社会システムの実証実験が行われており、新たな社会モデルの実証フィールドとなっている。

2009	●福岡水素タウン実証実験 ●全学共通ICカード導入(ICカードによる個人認証)	2014	●九大伊都キャンパス内におけるサイクルシェアリング実証実験 ●トウクトゥクを用いた観光用交通手段に関する実証実験
2011	●実証実験型マンションプロジェクト検討開始(伊都UAP) ●電動アシスト付レンタサイクル社会実証実験	2016	●ラーニングアナリティクスセンター設置 ●九州大学、富士通研究所、糸島市によるAI移住マッチングシステムの実証実験
2012	●白糸の滝小水力発電実証実験	2017	●自動運転バスの実証実験開始 ●救急医療分野におけるドローン・IoT等を活用した実証実験
2013	●九州大学でのBYOD開始 ●「ICTを活用した見守りの街糸島」実証実験 ●水素燃料電池バス実証実験(JR九大学研都市駅～九大伊都キャンパス)	2018	●共創学部創設

(3) 研究拠点形成、産業集積

タウン・オン・キャンパス地区^{※1}には、大学の研究機能や産学連携機能を補完し、受け皿となる施設が整備され、元岡地区では、レンタルラボ、産学連携施設などの整備も進められている。また、伊都キャンパス周辺の泊地区や、西九州自動車道前原インターチェンジ付近の糸島リサーチパーク等にはレンタルラボや産業化支援施設などが順次整備されている。これらを利用する企業、研究機関等が堅調に増加している。

大学との共同研究等を契機として、学術研究都市に拠点を設置する企業も現れ、水素エネルギー、有機光エレクトロニクス、半導体、ナノテク、バイオなど、様々な分野において、世界最先端の研究・開発クラスターが形成されてきている。

さらに、これらの整備と並行して、九州大学では、ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター^{※2}や起業部における起業家人材育成、九大ギャップファンドによるベンチャー企業の起業支援などの取組が積極的に行われている。

これらの取組により、学術研究都市において、新しい産業やイノベーションを創出する環境やシステムが整いつつある。

※1 タウン・オン・キャンパス地区：九州大学センターゾーン(図書館、椎木講堂、ビッグオレンジ等が整備されたメインゲート一帯のエリア)とそれに隣接する区域を一体的に整備し、研究・開発、居住、生活サポート機能を導入する地区。

※2 ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター：2010(H22)年に設立された九州大学の起業家育成機関。九州大学の全学生を対象として、体系的なアントレプレナーシップ教育が行われている。

- 2000 ●九州大学TLO・知財ライセンス事業開始
- 2003 ●九州大学産学官連携本部 (IMAQ) 設置、九州大学ビジネススクール (QBS) 設立
- 2004 ●学術研究に関する広報活動事業 (OPACK セミナー) 開始
- 2006 ●超高压電子顕微鏡フォーラム事業開始
- 2008 ●福岡市産学連携交流センター (FiaS) 1号棟開所 (2013 2号棟開所) (元岡地区)
- 九大学研都市産学連携推進会議設置
- 2009 ●九州大学南口泊研究団地分譲開始
- 2010 ●水素エネルギー製品研究試験センター (HyTReC) 開設 (糸島リサーチパーク)
- 九州大学ロバート・ファン/アントレプレナーシップ・センター (QREC) 設立
- 2011 ●糸島リサーチパーク分譲開始
- 三次元半導体研究センター・社会システム実証センター開設 (糸島リサーチパーク)
- 分析化学講習会開始
- 2013 ●有機光エレクトロニクス実用化開発センター (i³-OPERA) 開設 (元岡地区)

- 2015 ●ベンチャー投資組織「QBキャピタル」設立
- 福岡市産学連携交流センター「よろず相談室」設置:企業の課題解決支援の取組試行
- 株式会社Kyulux設立 (有機ELディスプレイ発光素子材料開発) (FiaS内)
- 2016 ●ベンチャー投資組織「FFGベンチャービジネスパートナーズ」設立
- 九州大学ヘルスケアシステムLABO糸島開所
- 2017 ●「分析・解析よろず相談事業 (分析NEXT)」開始
- 九州・大学発ベンチャー振興会議設立
- 産総研・九大水素材料強度ラボラトリ (HydroMate) 開設
- ふくおか産学共創コンソーシアム設立
- 九大起業部設立
- 九大ギャップファンド設立
- 2018 ●「九州大学サイエンスパークー糸島市」共同研究開始
- KAICO株式会社設立 (蚕タンパク質活用研究試薬・ワクチン生産) (FiaS内)



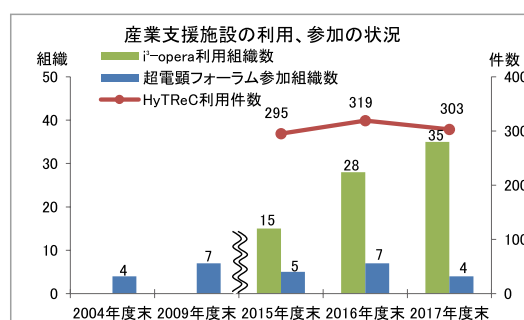
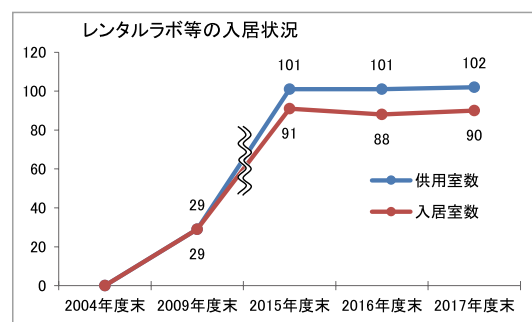
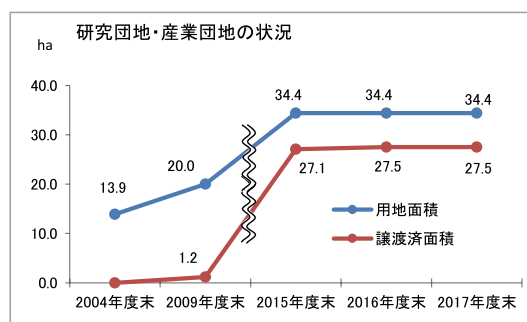
福岡市産学連携交流センター



有機光エレクトロニクス実用化開発センター



水素エネルギー製品研究試験センター



2 知・住・悠の舞台となる快適空間の形成

(1) まちづくりの取組

九州大学の移転を契機に、伊都キャンパスを核とする新たなまちづくりが着々と進められ、学術研究都市の人口は、伊都キャンパスが開校した2005(H17)年から2015(H27)年までの10年間で約1万5千人増加した。

伊都キャンパスの開校にあわせて学術研究都市の玄関口として開業したJR九大学研都市駅周辺などでは、住宅をはじめ、公共施設、医療・福祉関連施設、商業施設等の立地が進み、生活利便性の高い地域が形成されている。

また、伊都キャンパスに近接する地域では、土地区画整理事業、地区計画の区域指定等により、住宅・商業・サービス施設のほか、産学連携の場となる研究・開発施設が立地するなど、大学と連携したまちづくりが進んでいる。

(2) 都市基盤の整備

都市計画道路やJR筑肥線新駅の整備など、学術研究都市の骨格となる都市基盤の整備は構想に基づいて着実に進んでいる。

2018(H30)年には、国道202号バイパスと伊都キャンパスのメインゲートを結ぶ学園通線(東回りルート)が全線4車線で供用開始された。また、学生や教職員の増加に伴う交通需要への対応についても、伊都キャンパスへのアクセスとして、2005(H17)年に開業したJR九大学研都市駅のほか、福岡市都心部や糸島市内からもバス路線が開設され、需要の増加に応じて運行本数が増強されるなど、充実が図られてきている。

(3) 留学生、外国人研究者等の受け入れ環境

伊都キャンパス内外における外国人居住施設の整備が進むとともに、地域との交流を促進する取組も始まっており、留学生やその家族などを地域全体で受け入れる環境づくりが進められている。

(4) 学術研究都市の交流・にぎわいづくり

2005(H17)年に、伊都キャンパスに情報発信拠点として「ビッグオレンジ」が開館した。また、2010(H22)年にはJR九大学研都市駅前に、地域の交流拠点として「福岡市西部地域交流センター（さいとびあ内）」が開館した。

2007(H19)年から2015(H27)年までの間には九州大学と地域が双方の魅力を発信するイベント「伊都祭」が開催され、また、2013(H25)年からは「アーバンデザイン会議九大(UDCQ)」において、学生と地域の交流イベントやまちづくりをテーマに、産学官民によって議論が行われている。この他、2013(H25)年からはJR九大学研都市駅周辺において、さいとびあ、OPACK、地域の住民、事業者等の協働により「いとにぎわい祭り」が開催されるなど、新たな交流やにぎわいが創出されている。

学術研究都市における都市づくり、研究・開発施設等の整備、新たに生まれている交流やにぎわいの様子については、OPACKをはじめ、様々な機関によって広く発信されている。

- 1997** ●伊都土地区画整理事業事業認可～2015事業完了
- 1999** ●田尻土地区画整理事業事業認可～2006事業完了
- 2000** ●学園通線(東回りルート)都市計画決定
- 2005** ●伊都キャンパスにビッグオレンジ開館(再掲)
●学園通線(西回りルート)一部都市計画決定
●中央ルート都市計画決定
●JR九大学研都市駅開業
●バス運行開始:伊都キャンパス～九大学研都市駅(昭和バス)伊都キャンパス～福岡都心部(西鉄バス)
●学園通線(東回りルート)一部供用開始
- 2006** ●タウン・オン・キャンパスまちづくり推進会議設置(～2012)
●泊カツラギ地区計画決定
- 2007** ●学園通線(西回りルート)一部供用開始
●中央ルート一部供用開始
●桑原土地区画整理準備組合設立
●伊都祭開始:九大と地域がキャンパスと地域の魅力を発信(～2015)
- 2008** ●糸島市(旧前原市)コミュニティバス九大

- 線運行開始
- 2009** ●千里土地区画整理事業事業認可～2011事業完了
●元岡土地区画整理事業事業認可～2012事業完了
●外国人にも住みやすい環境整備推進会議設置
- 2010** ●福岡市西部地域交流センター開館
- 2012** ●前原東土地区画整理事業事業認可～2018事業完了
- 2013** ●水素燃料電池バス実証実験(再掲)
●アーバンデザイン会議九大(UDCQ)開始:産学官民によるまちづくり活動
●九大学研都市文化フェスティバル開始:留学生と地域住民との交流
●いとにぎわい祭り開始:OPACKと地域の協働開催
- 2017** ●糸島市九州大学国際村構想策定
- 2018** ●学園通線東回りルート全線4車線供用開始
●昭和バス伊都営業所開所
●北原・田尻土地区画整理事業事業認可
- 2019** ●JR糸島高校前駅開業(予定)



伊都土地区画整理事業



元岡土地区画整理事業



前原東土地区画整理事業



泊カツラギ地区地区計画



学園通線



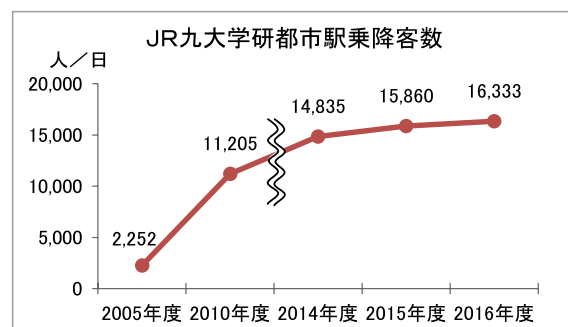
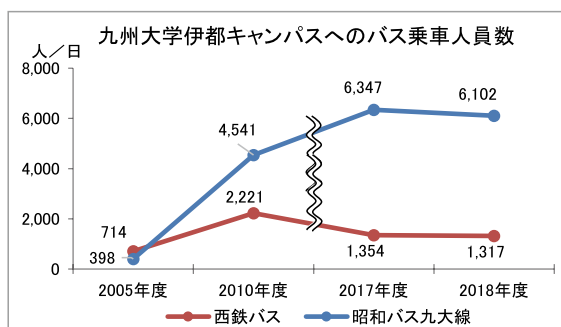
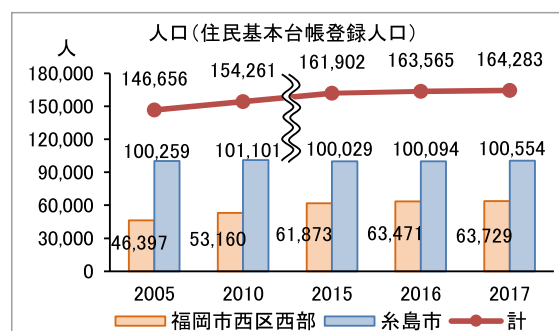
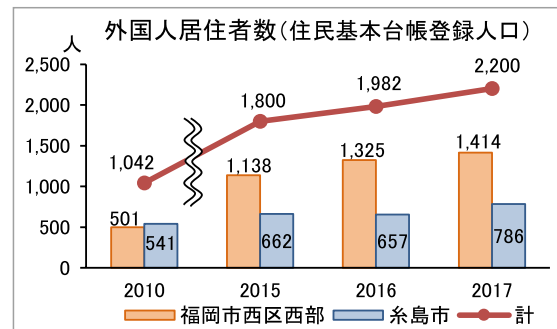
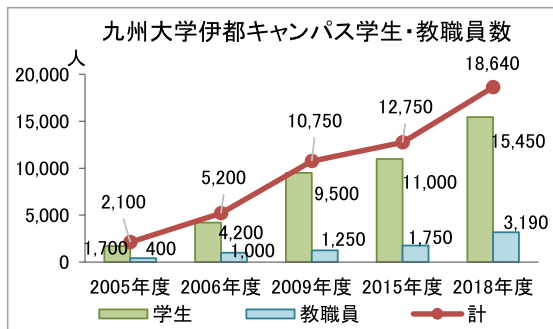
JR九大学研都市駅



さいとびあ(福岡市西区地域交流センター)



JR糸島高校前駅(2019年開業)



九州大学学術研究都市

九州大学伊都キャンパス

JR九州大学研究都市駅

202号線

天神

九大病院地区

福岡IC

福岡空港

JR博多駅

地下鉄線

今宿IC

福岡IC

福岡都市高速道路

前原IC

JR筑前前原駅

周船寺IC

西九州自動車道 (福岡前原道路)

太宰府IC

山陽新幹線

九州自動車道

<交通インフラ>

- 完了
- 整備中
- 未着手
- 計画道路
- 模想ルート

<開発地区>

研究系	産業系	商業系	居住系
整備済・中	整備済・中	整備済・中	整備済・中
計画	計画	計画	計画

糸島市企業立地推進計画の指定地域のうち九大連携地域

Ⅲ 社会経済情勢の変化

構想策定から17年が経過し、学術研究都市を取り巻く社会経済情勢は、大きく変化している。

(1) 科学技術政策 ～地域イノベーションの創出へ～

国の「科学技術基本計画」「科学技術総合イノベーション戦略」において、「地方創生」に資する科学技術イノベーションの推進、地方創生の推進や地域社会の自律的な発展など、地域におけるイノベーションの創出が重点的な取組に位置付けられた。

(2) 世界に先駆けた超スマート社会の実現 (Society5.0)

国の「第5期科学技術基本計画(2016(H28)年)」において、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会(Society5.0)^{※3}」が未来の姿として提起され、科学技術イノベーション政策が主要な政策に位置付けられた。

(3) 人口減少・少子化、高齢化社会の進展

我が国においては、総人口とともに18歳人口も長期の減少過程に入ると予測されており、科学技術イノベーション活動を担う人材の量的確保が困難になっていくことが懸念される。

(4) 地球環境・エネルギー問題の深刻化

経済成長や産業構造の変化などに伴い、資源・エネルギーや食料の逼迫、気候変動・地球温暖化など、地球環境問題がクローズアップされている。

(5) グローバル化の進展

グローバル化がますます進展する中で、世界に広がる様々な知識・技術・人材の国際的な獲得競争が激化している。

(6) 福岡都市圏の成長、全国ブランドへ

福岡都市圏は、豊かな自然環境の中に充実した都市機能・交通ネットワークがコンパクトに集積していることなどから、住みやすい都市として評価されるとともに、多くの人や企業等を呼び込んでいる。また、学術研究都市も知名度が向上し、移住人気の高まりをみせている。

※3 超スマート社会：必要なもの・サービスを、必要な人に、必要なだけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といった様々な制約を乗り越え、生き活きと快適に暮らすことができる社会。狩猟(Society1.0)、農耕(〃2.0)、工業(〃3.0)、情報(〃4.0)に続く新たな社会を「Society5.0」と定義。

(Society5.0で実現する社会(内閣府ホームページより))

- ・IoT (Internet of Things) で全ての人とモノがつながり、新たな価値が生まれる社会
- ・AI (人工知能) により、必要な情報が必要な時に提供される社会
- ・ロボットや自動走行車などの技術で、人の可能性がひろがる社会
- ・イノベーションにより、様々なニーズに対応できる社会

Ⅳ 新たなフェーズにおけるめざす姿

これまでの取組による様々な事業の成果と社会情勢の変化への対応を踏まえて、次の3つの都市像を概ね10年後の「九州大学学術研究都市のめざす姿」として掲げる。

～九州大学学術研究都市のめざす姿～

1

持続的にイノベーションが創出される活力ある学術研究都市

大学等と地域経済社会による新たな関係づくりにより、チャレンジする多種多様な人材が輩出され、世界に通用する地域発イノベーションが創出されている。

2

先進技術がもたらす次世代の豊かな暮らしがある学術研究都市

IoT、ビッグデータ、人工知能(AI)など先進技術を活用して、世界が注目する快適、安全、安心な生活環境(九大学研都市発 Society5.0)が実現している。

3

自然、歴史、文化を享受し、多様な人々が交流する学術研究都市

糸島半島の豊かな地域資源が、住民、来訪者など、すべての人々を魅了し続け、世界・アジアの多様な人々が交流している。

今後、上記「めざす姿」の実現に向けた取組を推進し、次に掲げる指標の達成度をはじめ総合的な見地から評価・検証を行う。

- 学術研究都市への企業の進出・創業や学術研究都市発ベンチャーの起業を今後10年で100社以上実現する。
- 学術研究都市における新しい社会の実現に向けた先端技術の実証・実装事業を今後10年で100件以上導入する。
- 学術研究都市における域外交流 {企業視察・学術会議(国際会議等)} を10年後に年間500件以上とする。

さらに、これにとどまらず、変化し続ける社会経済情勢等を捉えて、学術研究都市における科学技術・新産業の創出や、それを支える居住環境の形成等に関する個別の指標を適宜設定しながら、戦略的な取組を展開していく。

V めざす姿の実現に向けた課題

伊都キャンパス移転完了後の新たなフェーズにおいて、「九州大学学術研究都市のめざす姿」の実現に向けて、特に次の課題に取り組んでいく。

①「持続的にイノベーションが創出される活力ある学術研究都市」の形成に向けて

- ・ 基礎研究から応用、実証に広がる九州大学の知的資源等を活かしたイノベーションの創出、イノベーション人材の育成
- ・ 地域の中核的企業の育成、ベンチャー育成・スタートアップ支援
- ・ 地域の特性に即したオープンイノベーションの環境づくり
- ・ 我が国の産業競争力を支える研究開発拠点の形成・産業集積の推進、グローバル人材の育成
- ・ 福岡都市圏及び九州全体における様々な分野での大学、企業、各種機関等との連携

②「先進技術がもたらす次世代の豊かな暮らしがある学術研究都市」の形成に向けて

- ・ IoT・ビッグデータ・AIなどの先進的な技術を導入したまちづくり
- ・ 未来型エネルギーの先導など、社会実証・社会実装の取組の促進による持続可能な社会形成
- ・ 九州大学・学術研究都市への交通アクセス、域内移動のさらなる充実、円滑化

③「自然、歴史、文化を享受し、多様な人々が交流する学術研究都市」の形成に向けて

- ・ 学術研究都市の自然、景観、歴史、文化、食等を享受し、賑わいを楽しむ、快適で質の高いライフスタイルの創出
- ・ 学術研究都市のさらなるグローバル化、国籍に関わらず誰もが安心して快適に暮らせる居住環境の創出
- ・ 学術研究都市の躍動感や新たなフェーズにおける取組・特色等を伝える情報発信
- ・ 学術研究都市のMICE誘致の推進

Ⅵ めざす姿の実現に向けた取組の方向

【戦略1】『知の交流・創造活動によるイノベーション・エコシステムの構築』

学術研究都市が有する自然科学や人文社会科学等の幅広い分野の知的資源を活かし、起業や新たな産業の創出を力強く支援するとともに、地域発イノベーションを多発的かつ持続的に誘発するための基盤となるエコシステムを構築し、研究開発等の成果の地域展開(社会貢献)を推進する。

(1) イノベーション人材の育成

「ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター」や「起業部」の活動、自然・人文・社会を横断する共創学部教育手法の全学部展開、大学院教育における「ダ・ヴィンチプログラム^{※4}」など、九州大学の先進的取組とともに、基礎研究から応用、実証に至る研究開発や他大学・企業・自治体等との連携、先進的ベンチャー企業やクリエイティブ人材との交流機会の創出など、イノベーション人材の育成やイノベーション人材が生まれる環境づくりを強化する。

(2) 大学発ベンチャーの創出・育成

「九大ギャップファンド」、「九州・大学発ベンチャー振興会議」(2017(H29)年設立)の取組、自治体や各種団体が推進するスタートアップ・ベンチャー支援事業を最大限活用して、大学発ベンチャー企業の育成を推進し、地域経済のさらなる活性化を促進する。

(3) イノベーションを創出する交流・連携の場づくり

多様な主体が参加し、幅広くステークホルダーや有識者等の意見を柔軟に取り入れる場(ワークショップ等)を設けるとともに、「ふくおか産学共創コンソーシアム」^{※5}など既存ネットワークも活用し、自然科学系や人文社会科学系等の学際交流、他の大学や地域企業も含めた連携など、学術研究都市発のイノベーション創出を喚起する交流・連携の場づくりを推進する。

併せて、持続的にイノベーションが創出されるよう、法律・金融・経営等も含めた様々な専門人材によるサポート体制を構築し、イノベーションの種となる斬新なアイデアを守り育てる環境と仕組みづくりに取り組む。

また、九州大学の研究シーズや研究者・学生の取組を実用化・産業化に結びつける研究施設等の集積を図るとともに、大学、企業、地域及び各研究・開発拠点が密接に連携し相乗効果を生み、持続的に発展する仕組みづくりに取り組んでいく。

(4) 研究開発資源の集積を活かした新産業の創出

九州大学の多種多彩な研究シーズや人材といった資源と、学術研究都市が有する研究開発機能・施設・設備を活かし、研究機関、企業等のさらなる集積や新たな産業創出を促進する。

※4 ダ・ヴィンチプログラム：学府、専攻及び教育プログラムを横断するオーダーメイド型の大学院学位プログラム。

※5 ふくおか産学共創コンソーシアム：地域におけるイノベーション実現と地域経済発展を目的とした、企業・大学等研究機関・経済団体・産業支援機関などによる、交流・連携ネットワーク。2017(H29)年設立。

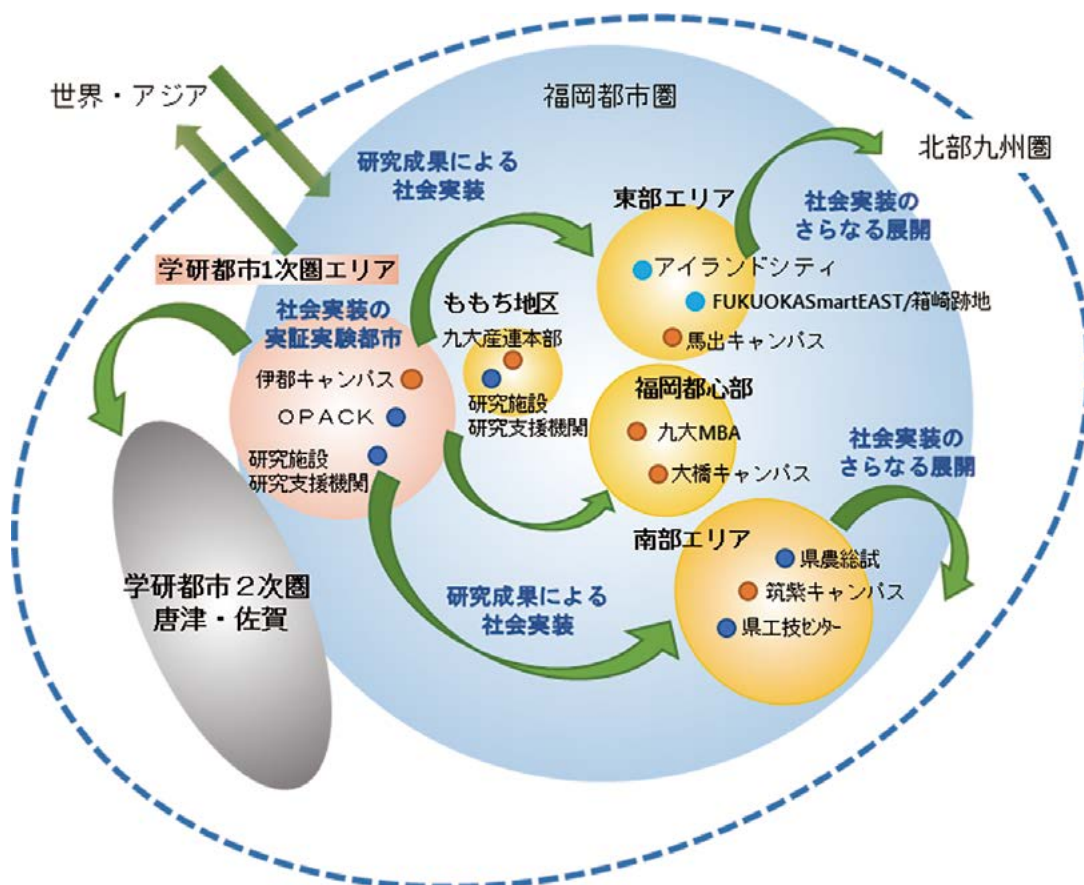
例えば、附属農場を併設する伊都キャンパスの特徴を活かし、周辺地域等との連携によるスマート農業の実証実験等を推進し、その成果を地域に還元するとともに、国内外へ発信して社会貢献するというような新産業創出のモデルづくりに取り組む。

(5) 社会実験と社会実装のさらなる推進

九州大学の知的資源や質の高いフィードバックが可能な学生・研究者、先進的各種研究支援設備、都市と自然の多様なフィールドなど、伊都キャンパスを中心とした学術研究都市の持つ実証環境を活かし、実証事業等を積極的に誘致・導入していくとともに、先進技術等の社会実装を推進していく。

また、九州大学エネルギー研究教育機構を中心とする先進的な取組(未来型エコキャンパスづくり)を基とした未来エネルギー技術等を学術研究都市及び国内外へ普及していくことや、防災まちづくり・災害復興における学際的な体制による活動など、社会貢献を推進する。

九州大学学術研究都市における研究開発等の成果の地域展開(社会貢献)イメージ



【戦略2】『快適で質の高いライフスタイルを実現する環境整備』

自然、歴史、文化などの地域の特性や九州大学の知的資源や人的資源を活かし、快適で質の高いライフスタイルと都市空間を創出する。

(1) 大学と地域社会が共生するまちづくり

タウン・オン・キャンパス地区において、椎木講堂や中央図書館など大学施設や機能を活用し、外部からも利用しやすい環境をつくり、大学と地域との連携を深め、大学とまちが一体となった空間を形成する。

また、産学官と地域のコミュニティを形成し、地域と学生・研究者の交流や良好な教育環境、学術研究都市ならではの賑わいの創出を図る。

さらに、九州大学の知的資源、人的資源を活かし、大学研究者による講義や研究施設見学、市民講座などの実施や、環境との共生など地域課題の解決に向けた取組を推進する。

(2) 良質で快適な居住環境の形成

伊都キャンパス周辺地域の発展に合わせて、学生や教職員向けの住宅、研究者が滞在する宿泊施設のほか、生鮮食料品店や飲食店、娯楽施設、商業施設、宿泊施設といった生活利便施設などの立地を促進し、学術研究都市の居住環境の向上や都市的賑わいの創出を図る。また、自然、歴史、文化、食などの魅力を享受できる環境づくりを推進し、快適で質の高いライフスタイルを提供する。

(3) 学術研究都市の交通体系の強化

学術研究都市の骨格となる基幹交通ネットワークについては、引き続き計画区間の整備を推進するとともに、居住人口の増加や学会・シンポジウムの開催等に伴う交流人口の増加への対応や、安全・安心・快適な交通環境づくりに取り組んでいく。

また、新技術を活用した交通システムの導入を含めて、社会情勢やニーズに応じた交通のあり方について長期的な検討を行うなど、学術研究都市内外のさらなる交通アクセスの向上を図る。

【戦略3】 『世界・アジアとの交流』

温もりのある国際交流を先導する舞台として学術研究都市を形成し、世界・アジアの人々とのネットワークを構築する。

(1) グローバル人材の育成

九州大学に新たに創設された共創学部をはじめ、九州大学の学内や連携する他大学において、海外からの研究者や留学生とともに学び、国際的な視点を持って活躍するグローバル人材の育成に取り組む。

(2) 海外からの研究者・留学生等の居住環境の形成

海外からの研究者・留学生やその家族などの子育て、教育環境、生活サービスの充実など、安心して勉学や研究に励むことができる居住環境の形成を図る。

(3) 海外からの投資の呼び込み

在日公館(領事館等)や交流団体等との連携体制を構築し、国内企業だけでなく、外資系企業の誘致や海外からの投資を促進する。

(4) 海外からの研究者・留学生等と地域社会との共生

海外からの研究者や留学生等と地域の住民や企業等が相互に理解を深め、豊かな共生環境を形成するため、交流機会の創出、地元企業とのマッチング機会の提供などに取り組む。

【戦略4】 『九州大学学術研究都市のシティプロモーション』

各戦略を効果的に推進するため、九州大学に関係が深い国内外の研究者や企業等をはじめ、様々なセクターに対して、学術研究都市の知名度向上を図る。

(1) 新たなフェーズにおける戦略的広報の推進

学術研究都市における研究プロジェクトやベンチャー企業の周知、学術研究都市そのものの魅力やポテンシャルの認知度向上を図り、優秀な学生等の獲得や国内外からの投資を促進するため、関係機関の広報ツールやマスメディアの活用、国内外事務所との連携、学生・若者・クリエイター等情報発信力のある人々との協働など、戦略的なシティプロモーションを推進する。

また、国際会議や学会を多数開催する九州大学の強力なMICE誘致機能を活用し、アフターコンベンションを含め、来訪者、企業等に対して学術研究都市を効果的にPRしていく。

VII めざす姿の実現に向けた推進方策

1 推進体制

(1)九州大学学術研究都市推進協議会

協議会の構成団体は、各戦略の推進に向けてそれぞれの役割を果たしていくとともに、「めざす姿の実現に向けたプロジェクト(以下、「プロジェクト」という。)」に参画するなど、その推進を支援する。

また、各戦略の実施状況を定期的に確認・評価し、必要に応じてOPACK及びプロジェクトチームに対する助言や戦略の推進に関する検討を行う。

特に、協議会の幹事会構成団体である(一社)九州経済連合会・九州大学・福岡県・福岡市・糸島市は、構想を推進するメインエンジンとして、プロジェクトを推進していく。

(2)公益財団法人九州大学学術研究都市推進機構(OPACK)

OPACKは、協議会の構成団体が実施する事業の円滑化を図るための調整機能を果たすとともに、プロジェクトの企画・実施調整、プロジェクトチームの組成・運営、プロジェクトの進捗管理などを行い、構想及び事業方針を推進する中心的役割を担う。

(3)めざす姿の実現に向けたプロジェクトチーム

プロジェクトチームは、協議会の構成団体やOPACKに限らず、プロジェクトの推進に必要な個人・企業・大学・機関・官公庁、様々な分野における専門的な知見・技能を有する者など、多様なメンバーによって構成する。

2 めざす姿の実現に向けたプロジェクト

各戦略の推進にあたって、OPACKを中心に、協議会の構成団体をはじめ、様々な機関、人材等と連携を図りながらプロジェクトを企画し、組成していく。

プロジェクトの具体的な実施内容、体制、作業工程、数値目標などは、別途策定するOPACK中期事業計画等において明確化するとともに、OPACKは、その実施状況を定期的に協議会に報告の上、学術研究都市の発展状況、社会経済情勢の変化や科学技術の進歩などを勘案して評価・検証し、必要に応じて適宜、プロジェクトの新設・見直し・廃止を行う。

【推進方策のイメージ】

九州大学学術研究都市のめざす姿

- ① 持続的にイノベーションが創出される学術研究都市
- ② 先進技術がもたらす次世代の豊かな暮らしがある学術研究都市
- ③ 自然、歴史、文化を享受し、多様な人々が交流する学術研究都市

